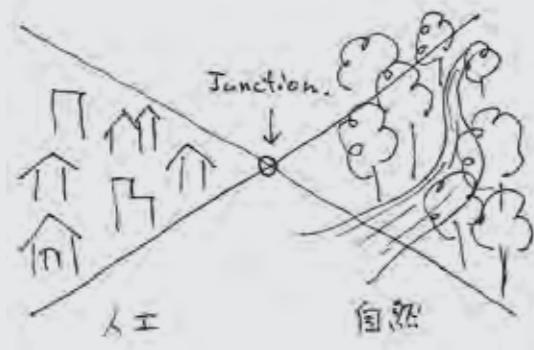




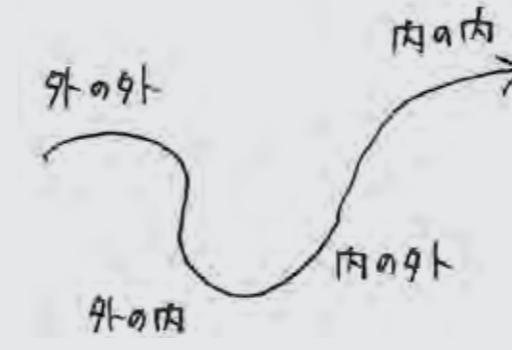
Soul Junction

～日常の中の非日常へ～



1 「人工」と「自然」の Junction

- 計画地は住宅地である「人工」と魚野川、坂戸山の豊かな「自然」とのJunction（境界）に位置する。その土地のコンテキストをなぞり、「焦点」「逆焦点」のデザイン手法を用いる。
- 建物ボリュームを段階的にスケールダウンすることで、まちの中に馴染む景観にしている。



2 「外→内」へ段階的にスケールダウンするシークエンス

- 住宅地から建物奥に至るまでの領域を、外の外、外の内、内の外、内の内という4領域に分け、外の領域から内の領域へシームレスにシークエンスが展開する。ヒューマンスケールの体験上にも小さなJunctionが連続する。

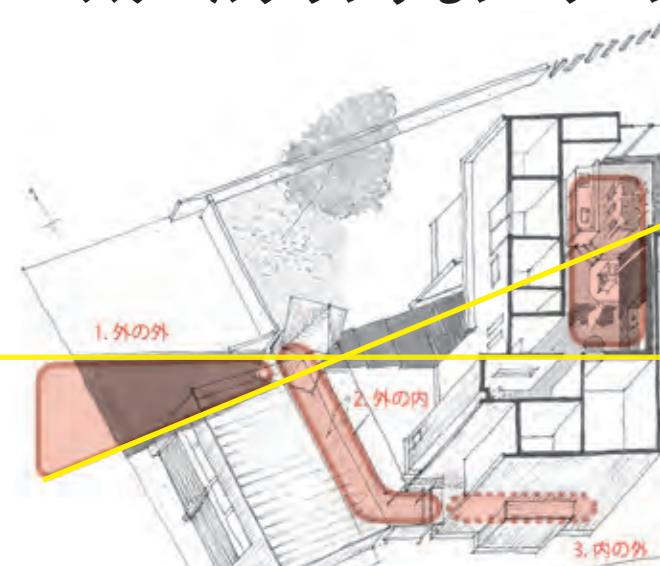


3 ワンフロア生活

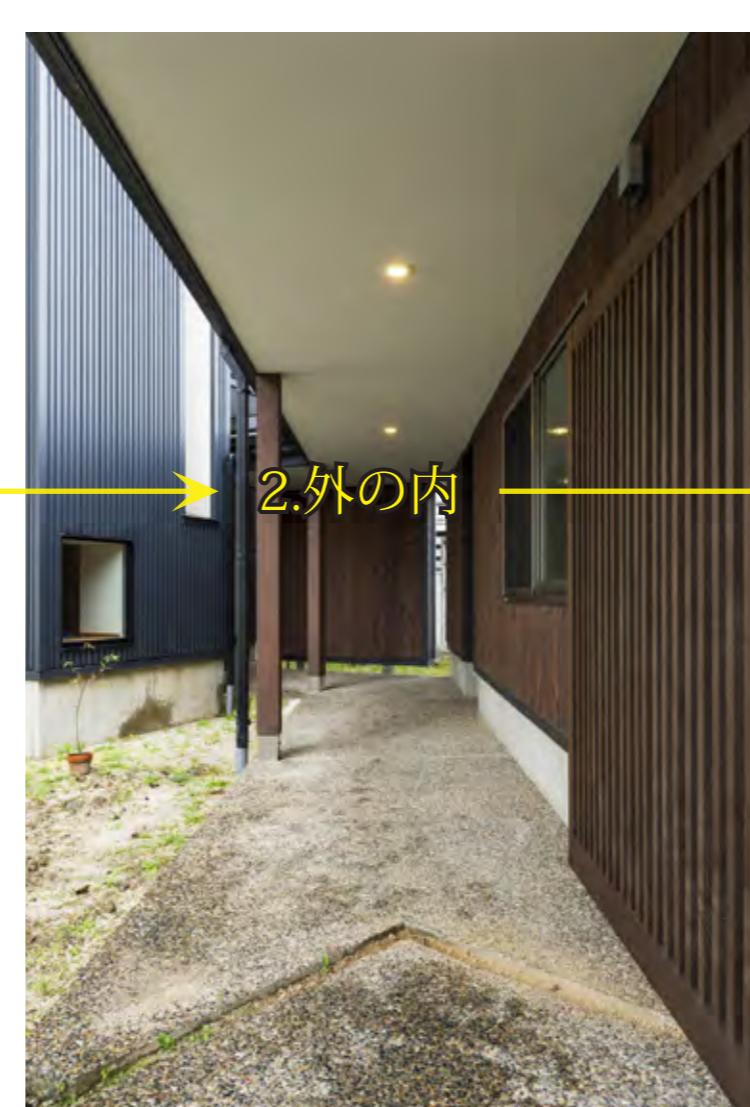
(バリアフリーと効率的な暖房計画)

- 「自然」を感じる 2F のワンフロアで生活を完結するバリアフリー計画。
- 夏季は魚野川からの通風計画、冬季はマキストーブを中心とした暖房計画による環境負荷の軽減。

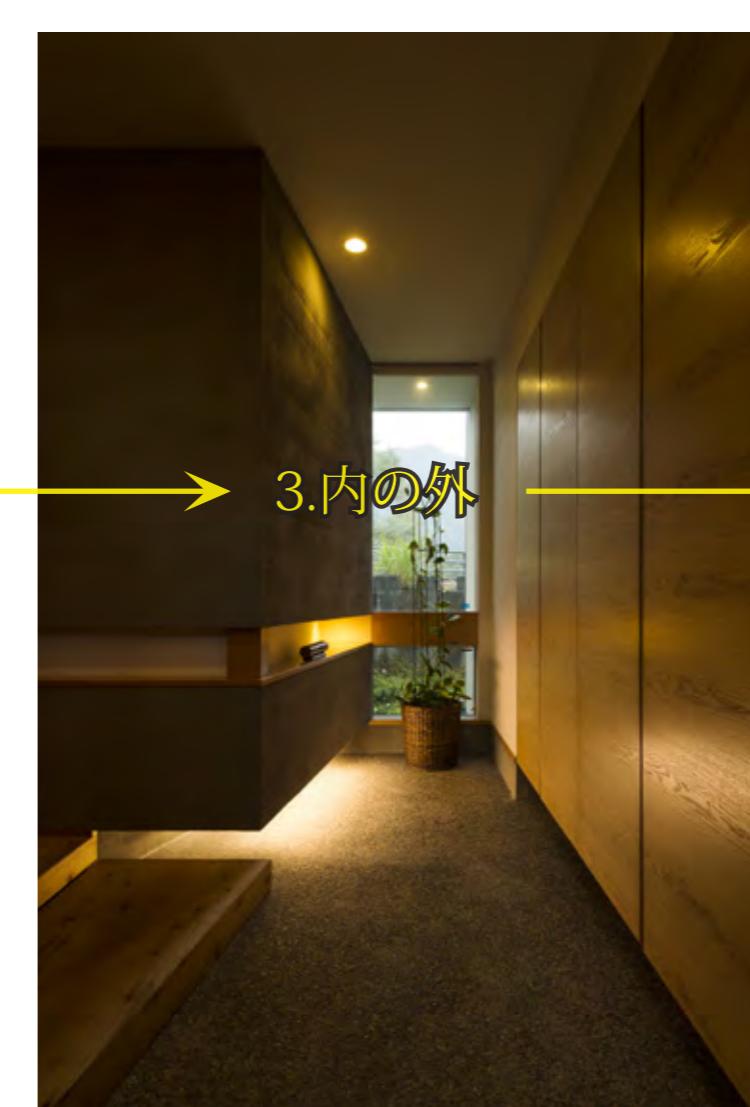
2 「外→内」へ段階的にスケールダウンするシークエンス



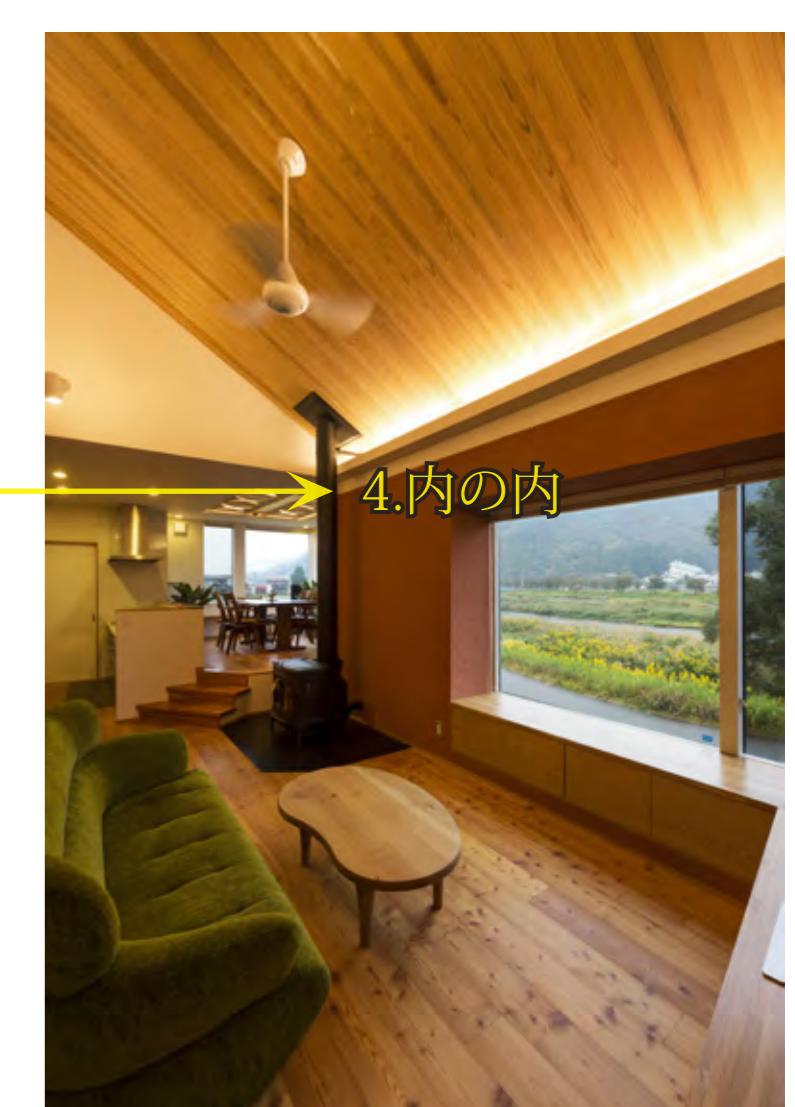
人工と自然という土地のコンテキストと、焦点法によるマスター・プランという大枠のテーマに沿って、人の動線へスケールダウンしたシークエンスにも「日常の中にある非日常」を実現する手法を用いた。



【(上)道路から見える(下)土手から見る外観】
坂戸山を背景に土間の形状が東屋に向かって焦点が収束していく。平屋の車庫とRC壁が道路側に配置することで、セットバックした母屋がスケールダウンし景観に馴染んでいる。



【玄関越しに景色を取り込む】
玄関は内部空間でありながら、突き当たりは一面サッシ越しに外部を取り込んでいる。外空間をもう一度室内に取り込み、「外」の余韻を残している。



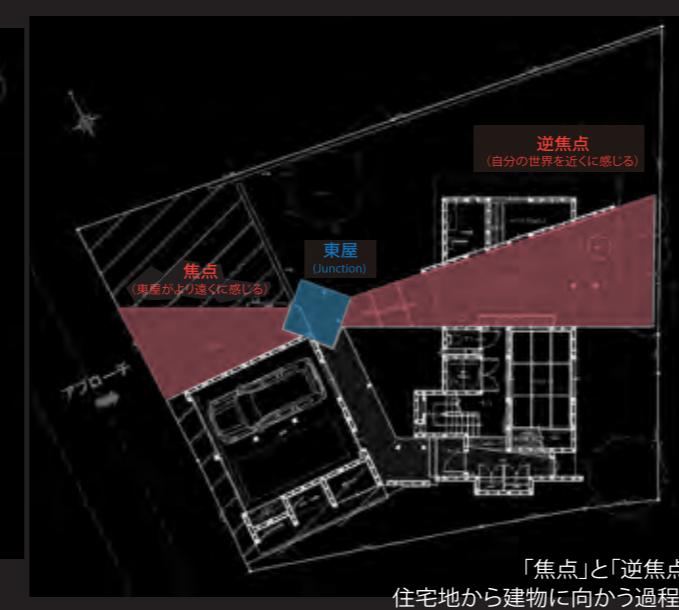
【リビング、ダイニングを見る】
2Fのリビングは「つもじ」内の領域。重厚なエンジ色の漆喰の間にくり抜いた窓は景色をより繊細のよう切り取っており、自然景観とリビングが同化している。リビングとダイニングは段差を設けつつ空間を連続させながら変化をつけています。

1 「人工」と「自然」の Junction



【土地のポテンシャル】

計画地は住宅地が広がっている。一方、東側には土手があり、そこを上ると「魚野川」越しに坂戸山を一望でき、雄大な自然と対面できる。ここは「人工」の住宅地と「自然」とのjunction（接点）といえる場所である。また、クライアントは東京と新潟市に拠点があり、その生活を考えることで、2拠点を交錯する場所でもある。土地が持っている物語性と、クライアントの生活スタイルが持った物語性をつなげながら、そのポテンシャルを最大限引き出すことを考えた。



【馴染む景観】

住宅地から建物に向かう過程は、よりバースペクティブが強調されるように、道路から東屋に向けて土間の形状を絞っている。道路側からアプローチすると建物が遠くにあるよう感じ、日常から非日常への気持ちの切替を促す。

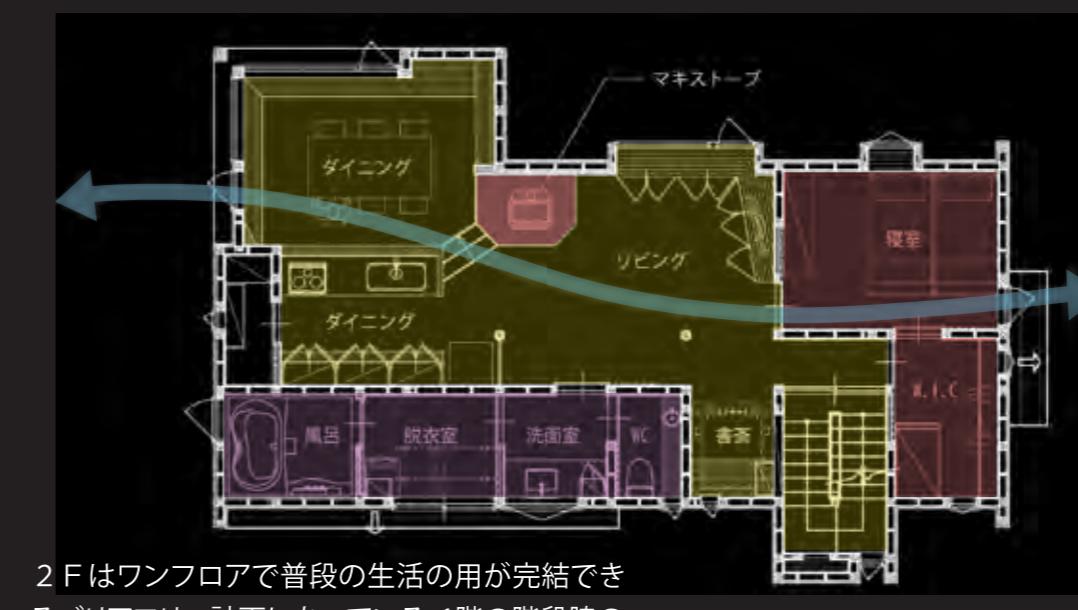
【焦点】

住宅地から建物に向かう過程は、よりバースペクティブが強調されるように、道路から東屋に向けて土間の形状を絞っている。道路側からアプローチすると建物が遠くにあるよう感じ、日常から非日常への気持ちの切替を促す。

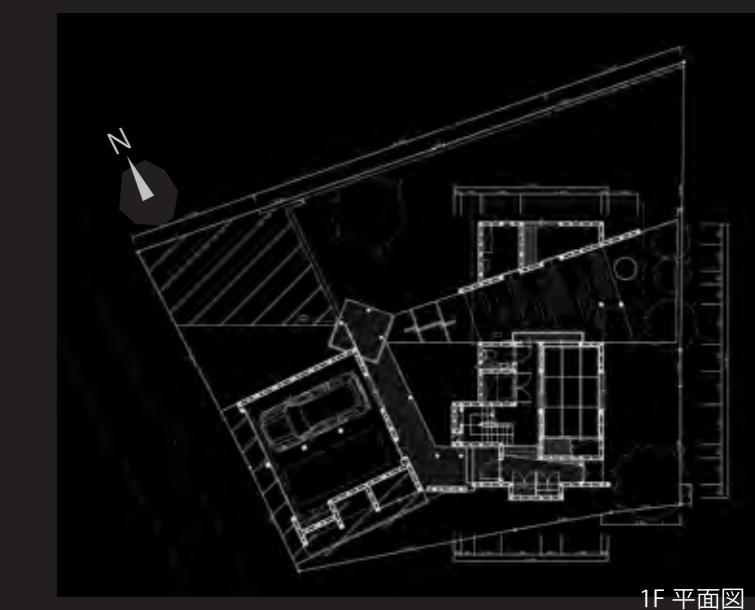
【逆焦点】

東屋をぐるぐると、今度は土間の形状が奥に向かって広がっていく逆焦点のデザインをしている。自然に視覚が感じる焦点法と逆のデザインとなり、遠いものが近くに感じる。東屋をくぐったときに非日常を近くに感じることができる。

3 ワンフロア生活



2Fはワンフロアで普段の生活の用が完結できるバリアフリー計画になっている。1階の階段脇の収納と2階の書斎は、将来EVを設置できる計画。



【暖房計画】

リビング・ダイニングの中間にマキストーブを配置することで、効率よい暖房計画になっている。



リビングから寝室方向を見る



【書斎】書斎は将来EV設置可能。

【通風計画】

夏は魚野川から南北に風が抜ける計画。